ドキュメント 太平洋戦争

3 冬の時代と花の蕾と

松浦総三・解説

ドキュメント

太平洋戦争

3 冬の時代と花の蕾と

松浦総三・解説

山口正之　立命館大学教授，『経済科学におけるレーニン主義』
上林貞治郎　大阪市立大学教授，『現代産業論』
佐々木敏二　立命館大学，『山本宣治』
竹内恒三郎　日本共産党名誉中央委員
石河　糺　児童文学評論家
尾崎秀樹　評論家，『大衆文学』
藤井松一　立命館大学教授，『戦後日本の歴史』
松浦総三　評論家，『戦後ジャーナリズム史論』

ドキュメント太平洋戦争③
冬の時代と花の蕾と

1975年7月20日　第1刷発行

解　説　松浦総三
発行所　今田　保
印刷者　三　進
発行所　汐文社
千代田区外神田2—3—2
03—253—5970
京都市下京区七条河原町西南角
075—341—6278

刊行の辞

太平洋戦争は、おそらく日本歴史上最大事件であると言ってもよいのではあるまいか。社会のあり方を一変させた変化の大きさについていえば、無階級無政府、そして野生の動植物を食料としていた原始社会から、階級と支配権力とが発生し、農業耕作を主要生産とする社会への移行と、極東の列島にとじこもり前近代の封建社会の伝統の内に埋れていた日本から、世界の資本主義近代社会の潮流の中に身を投じた日本への変貌と、このきわめて遠い時期ときわめて近い時期とに生じた二つの社会構造の変化に比べるならば、太平洋戦争による日本の変化は、あるいはそれらよりもひとまわり小規模の変化というランクづけができるかもしれない。しかし、前の二つの社会的変革が、何ほどかの犠牲なしには進まなかったにしても、比較的にナチュラルな歴史の発展として完了し、価値判断を加えて言えば、大局的に大きな進歩として評価せられる歩みであったのとちがい、太平

洋戦争は、日本歴史上前後に例のない惨禍を伴なった悲劇であったという点で、他の歴史上の諸事件とはまったく比べることのできない凄絶きわまるできごとであった。

石器時代、少くとも縄文時代から数えて一万年にちかい年月を閲した日本人の歴史の中で、太平洋戦争という比類の無い大事件を体験するように運命づけられた私たち戦前戦中世代の日本人は、この大事件の生証人として、どの時代を生きた日本人よりも、かけがえのない貴重な体験を経ていると言うべきであろう。その体験は、「御一新」という明治維新を生きぬいて、封建社会から資本主義社会への推移を体験してきた私たちの曾父母や曾祖父母たちの世代の人々の体験と異なり、思い起しただけでさえ心暗くなる辛酸と悲憤と痛恨とにみちみちている。したがって、これだけかけがえのない体験を身につけながら、ことさらに口をとじて体験を語ろうとしない人々も多いという。

私は、その人々の気持を理解することができる。しかし、私たちがその体験を私たちの肉体とともに火葬場のカマドの中で煙と化せしめ、あるいは土葬の塚穴の中の土と化せしめてしまい、ついに体験者が一人も生き残っていない、戦後世代の人々だけの時代が到来するとしたならば、もはやその体験は文字としてまたは写真として、残された記録以外に何も無くなってしまうほかない。戦争が終ってまだ三十年にしかならない今日でさえ、社会の大半は戦争体験の無い世代で占められているのだ。余生が次第に短くなって行く私たちが、今のうちに一つでも多く戦争体験を客観化しておかなければ、手おくれになる時期が目前に迫っている。私たちの世代の何百万人かが戦火の中に散って行った。死者は語らない。手記や作品を残した死者も多いが、すべてをありのまま感ずるままに書きのこす自由の無かった時期に書かれた文章に、すべてがつくされているはずはない。同世

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

代の多くの同胞が戦火に斃れたなかに生き残った私たちには、生ある間に少しでも戦争の真実を次の世代に語り伝える義務があると思う。

以上は私一個人の所見であって、このシリーズの編集責任者でない私に、執筆者諸氏が私と同じような考え方で執筆に当られたかどうかを確めるすべはない。しかし、さまざまの多様な立場にあらわれるこれだけ多数の方々が、この企画の意義を認め進んでそれぞれの主題の執筆を快諾されたのは、たぶん私の平素考えている右のような所見と、同じでないまでもそれほど遠くない動機からではないかと想像し、汐文社から請われるままに、私がかってに忖度した本シリーズ刊行の意義を一筆した次第である。

一九七五年五月三日憲法記念日に

家永　三郎

目次

十五年戦争下の学生はどう闘ったか　山口　正之…9
——ひとつの覚書的証言——
火を継ぐもの　10
象牙の塔　13
学生運動の新しい「ケルン」を　18
牢獄か戦線か——軍事教練反対闘争　27
かつての友人たちへ　32

大阪商大事件　上林貞治郎…37
「大阪商大事件」　38
「大阪商大事件」の一般的背景——　43
大阪商大を中心とするマルクス主義研究　54
「大阪商大事件」を中心とする状況　64
むすび——大阪商大の民主的再建　84

宗教弾圧政策と灯台社の抵抗
——兵役拒否と信仰の自由の闘い——　佐々木敏二…87

新治安維持法と宗教弾圧政策　89
「灯台社」兵役拒否事件　97
プリマス・ブレズレンの人々　115

侵略戦争下の獄中のたたかい　竹中恒三郎…121

大阪高商で学生運動へ　122
「二月事件」と私の入党　125
「日本共産党闘争小史」に感動　127
拷問に抗し非転向貫く　129
侵略戦争と右翼社民の裏切り　133
戦争下の党再建活動　135
三度目の逮捕と私の決意　141
空襲下の小菅刑務所　147
飢えと寒さの宮城刑務所　150

故市川同志と獄中で会う　153
敗戦から出獄まで　159
党と大衆組織と民主主義　162

ぼくら軍服にあこがれて　石河　糺…165
一枚の絵に出会った　166
映画に熱中する　170
少年兵志願票にかき入れる　181

ゾルゲ事件　尾崎　秀樹…189
――尾崎秀実の歩んだ道――
検挙の朝　190
処刑後三十余年　192
彼らはなぜ殺されたか　194
尾崎秀実の政治構想　201

奪われた言論　藤井　松一……207

ある暗黒の日の記録から　208
言論統制への道　212
戦争への協力と抵抗　216
思想・言論戦の参謀本部――情報局　219
「懇談会」という名での干渉と統制　222
戦争に協力する新聞界　226
大本営発表と流言飛語　231
横浜事件――血ぬられた言論　234

戦争下の言論統制と庶民の生活　松浦　総三……243

戦争報道の事実と虚構　244
アメリカに所蔵されていた戦時下資料　248
敗戦のきざしとともに　251
二六にもおよぶ弾圧法の下で　253
言論検閲機関　258
横浜事件の真相　261

特高警察の背後にあるもの　264
言論統制下の流言蜚語　263
庶民の流言は権力のデマと闘った　272
庶民の不敬言動のエネルギー　274
胃袋の中からの声こそ真実の声　277

解説　松浦　総三…283

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

十五年戦争下の学生はどう闘ったか

――ひとつの覚書的証言――

山口　正之

火を継ぐもの

私が佐賀中学の四年生の課程を修了して、佐賀高等学校文科甲類に入学したのは、昭和九年（一九三四）の春のことである。大学にいけるほどにゆとりのある家計ではなかったが、佐賀県育英会が、大学をでるまでひきつづいて経済的援助をしてくれた。

佐賀中学は、葉隠精神の校風でしられ、海軍兵学校や陸軍士官学校への入学率が上位にあることを名誉と考えるような学校であった。五・一五事件の青年将校の大部分は、この中学の秀才たちであった。当時の著名な「先輩」に、真崎甚三郎将軍がいた。私の在学中、将軍は、台湾軍司令官から参謀次長に赴任する途中、母校である佐賀中学に立ちよって、「東西文明の融合」といった壮大なテーマの講演で、在校生の私たちをすっかり退屈がらせたりしたことがある。この時期が、真崎将軍にとって得意絶頂のときであった。大学に入ったあと、私は、東京でもう一度、真崎将軍が同郷の学生たちにかこまれて雑談するのに参加する機会があったが、このときは、二・二六事件のあとで、将軍の話には、そこここに、失意、不満、自己弁解がうかがわれて、興ざめる思いをした記憶がある。

昭和九年といえば、すでに、日本が、戦争とファシズムの道にまっしぐらに突入しはじめていた時期である。だが、その前年には、滝川事件でのはげしい抵抗闘争の高まりもあり、また、大恐慌

による悲惨な貧困の傷跡もなまなましく残っており、軍国主義的熱狂が完全に時代をとらえ切るところまではきていなかった。全体として重くるしい閉塞感に、国民は、脱出の方向を模索していたようなときである。そのなかで、やっと十七才になりかけていた私は、わかものらしいよろこびに心を躍らせることもなく、なにか道理が無視されているといった暗い気持で、ひとり唇を噛むような毎日をすごしていた。

このふさぎの虫にとりつかれたような陰気な少年が、秋のある日、市内の書店の本棚に改造文庫で堺利彦訳のエンゲルス『社会主義の発展』をみつけたのは、まったく偶然のことであった。それまで、マルクス主義は国禁の思想であるという以外にはなんの予備知識ももたなかった私が、この小さな本の内容をどれだけ理解できたか、あやしいものである。それに、当時は、「社会主義」の名がわかものの心を希望に開くような時代は急速に過去のものになりかけていた。佐野、鍋山の『コミンターンへの袂別』につづき、三田村四郎、高橋貞樹、風間文吉、田中清玄などの日本共産党の最高指導者たちの「転向声明」が、なだれのようにつづいて、連日の紙面をにぎわせていた。資本主義世界最強のプロレタリア党をもつドイツが、ほとんど無抵抗でヒトラーの支配に屈服したという事実は、「社会主義」の権威にひどい打撃を与えずにはすまなかった。「社会主義」の名は、あかるい未来への希望を約束するようなものではなく、むしろ、敗北、挫折、拷問の屈辱などを連想させるようなものに転化していた。

それにもかかわらず、エンゲルスとの偶然の出合いは、深い感動で私の心の根底をゆり動かすこ

とになったのである。この本を読み終わった瞬間、マルクス主義は私をとらえ、その後の人生の曲折した有為転変にもかかわらず、二度と私から離れることはなかった。私に確信があったわけではない。ひとりわが道をいくといった気慨や勇気があったわけではない。私は小心翼々として神経質な少年であったにすぎない。止むに止まれぬもの、たとえそれが、目を開いたまま地獄への道を歩むことであるとしても、やはり、避けることはできないようものが、私をとらえてしまったのである。これこそ、古典とよばれるものの力なのかもしれない。偉大な思想は、言葉で理解することはできないときでも、けっして消えることのない感動で、人を、行動へとゆり動かすのだ。

この思想は理論と実践の統一を指示していた。「解釈」することではなく「変革」することをよびかけていた。私はマルクス主義を「実践」しなければならないと覚悟をきめた。私は、マルクス主義の伝道者となり組織者とならなければならなかった。こうして、私は、昭和十年（一九三五）初頭以来、自分ひとりで、高校のなかにマルクス主義者の組織をつくるための意識的な努力にとりかかることになった。

戦後、中国戦線で一年間の捕虜生活を終わって帰国した昭和二十一年（一九四六）の秋、私は、佐高の寮生によばれて講演にいったことがある。当時、学生たちは、「戦犯教授追放運動」を展開していた。このとき、私は、十年間の苛烈な戦争の時期を貫いて、たたかいの火は、消えることなく、後輩たちによって受けつがれてきたことを知ることができた。小林多喜二の『地区の人々』には、「火を継ぐもの」という副題がつけられている。よい言葉である。怒涛のような転向の季節の

進行のうらでは、「流れに抗して」、「火を継ぐもの」の若い隊列はけっして途切れることはなかった。これは、私だけのことでもなければ、私の高校だけのことでもなかった。それぞれのやりかたによってではあったが、全国の至るところで、「火を継ぐもの」がたえず新しく補充されつづけてきたのである。

象牙の塔

昭和十二年（一九三七）四月、私は、東大経済学部に入学した。私は、全国の高校から集まってくる東大では、きっと多くの「同志」と接触できるだろうと期待していた。私の高校の先輩で小倉中学卒業の小林庄一氏が、文学部倫理学科の三年生に在籍していた。私と同郷で佐賀県小城中学を卒業して五高を経由した岡正芳氏は、哲学科の三年生であった。岡氏は、東大セツルメントで活動していたし、小林氏は、東大消費組合の仕事をしながら、同時に、同人誌の『東大春秋』の編集にも参加していた。その前年には、二・二六事件があり、日独防共協定の締結があり、軍国主義の狂瀾はようやく日本全体をのみこもうとしていた。この年の五月、新聞は、河上肇博士が公判廷で「今後書斎にかえり実践から手をひく」と陳述したと報道していた。

私は、小林氏をつうじて、まず、『東大春秋』に参加することにし、多分、「大学の再建」といった標題であったと思うが、半封建的遺制のつよい資本主義社会で大学が占める地位、学生のはたす

役割の特殊な性格といったものを分析した論文を書いた。私のものを巻頭論文にすることがきまり、校正刷もできあがった。だが、情勢は急速に険悪化しており、『東大春秋』にたいする監視もつよまっていたため、最後の瞬間になって、弾圧を避けるため、雑誌の発行は中止することになった。大学時代の私の最初の論文は日の目をみることができなかったわけである。

七月七日、「蘆溝橋事変」が「勃発」した。政府は、公式には、「不拡大」方針を宣言していたにもかかわらず、いまや、中国全土への侵略戦争の拡大は、だれがみても、不可避であった。このころから、私は、今度は、東大セツルメントの仕事に参加するようになった。セツルのなかでは、岡正芳氏が、卓絶した頑強な理論家として尊敬されていた。私は、小林、岡の両先輩から、いろいろな形で、すぐれた指導を受けた。小林氏は、柔軟で、交際範囲が広く、親切であった。とかく人見しりしがちな私が、あとで東大内で「指導グループ」を結成することになった多くの同期生の友人を知るようになったのは、小林氏の仲介のおかげである。同氏はまた、比較的に貧困だった私の生活にもいろいろ気をくばってくれた。岡氏は、堅固な理論をもち、岩のように動かないたのもしさがあった。私は、岡氏が貸してくれた英語版でレーニンの『国家と革命』をはじめて読んだ。岡氏は、また、当時、非公然の研究会などで討論されていた「日本ファシズム幽霊論」を批判する論文を書いていたが、その原稿を読ませてもらったこともある。私は、昨年(一九七四)、『現代と思想』(青木書店刊)に「資本主義的発展と天皇制イデオロギー」という小論を書いたが、そのとき、あらためてこのころの岡氏との対話を思いおこした。周知のように、三二年テーゼは、日本における絶対

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com